

『人は何によって生きるのか』 (要旨)

聖書箇所：マタイ 4:23-25

【1】 イエスはガリラヤ全域を巡って

主イエスはガリラヤ全域で宣教を開始しました。その時に拠点としたのが、ユダヤ人の「会堂」(シナゴグ)でした。もともと「会堂」は、戦火、捕囚によって離散したユダヤ人が、礼拝をささげるために集まった場所であり組織であったとされます(『新聖書辞典』いのちのことば社)。

主イエスが巡回されたガリラヤ地方にも会堂がありました。その地方に住むユダヤ人は毎週安息日に会堂に集まり礼拝をささげました。主イエスは安息日ごとに会堂に集まった人々を教えられたのです。

さて会堂内部の正面には、律法の書と預言書の巻物を取めた箱がありました。毎週の安息日に礼拝を司る者は「律法」と「預言書」の巻物を朗読し、その意味を説き明かすこともありました(参照:ルカ4:16-)。そこで主イエスはみことばを説き明かされたのでした(4:23)。

ユダヤ人会堂は、学校教育や地方政治などの機能を有していましたが、あくまでもその集まりの中心は礼拝であり、みことばの朗読がなされていました。

【2】 イエスは権威ある者として

会堂において律法の教師が朗読されたみことばを説き明かすという光景は珍しいものではありませんでした。当時、律法の教師である律法学者は、旧約聖書を学び、研究し、そして過去の教師たちがどのようにそれを解釈してきたのかも熟知していました。そうした彼らはユダヤ人が律法に適った生き方ができるように、律法の意味を説き明かし教えました。イエスもそうした「教師」の一人として会堂に迎えられたのでしょう。しかしイエスの教えを聞くため、多くの人々が引き寄せられていきました。これまでの教師と何が異なっていたのでしょうか。

律法学者は、過去における権威ある教えを慎重に引用しました。それに対してイエスのご自身の権威に基づいて律法を説き明かされたのでした。「…群衆はその教えに驚いた。イエスが、彼らの律法学者たちのようではなく、権威ある者として教えられたからである。」(マタイ7:28-29)

律法の教師の一人だと思っていた人々にとっ

てイエスの教えは衝撃でした。それはイエスのご自身の権威によって神の意思を直接理解し人々に説き明かしたからでした(参照:ヨハネ1:17-18)。人々は「教え」の斬新な切り口ではなく、「権威ある者」であるイエスの教えに引き寄せられたのでした。

【3】 イエスは人の病を負い、痛みを担った

イエスの評判はあつという間にシリア全域に広がり、多くの人々がイエスのもとに引き寄せられたのでした。「…それで人々は様々な病や痛みを苦しむ人、悪霊につかれた人、てんかんの人、中風の人など病人たちをみな、みもとに連れて来た。イエスは彼らを癒やされた。」(24)

主イエスのもとに連れて行けば、病や痛み等が癒される。そのように多く人が期待しイエスのもとに押し寄せたのでした。彼らのごく普通の民衆で「ガリラヤ、デカポリス、エルサレム、ユダヤ、およびヨルダンの川向こう」(25)から集まりました。こうした民衆に「山上の説教」が語られました(5章以降)。

イエスは「権威ある者」として教え、「御国の福音を宣べ伝え」(23)しました。すなわち自己中心的で的外れな生き方をする者に、心の向きを変え、神につくられた者として新たに生きようへと宣教したのです(17)。それと同時に民衆の抱える日々の痛みを知り、深く憐れみ、そして癒されました(参照:マタイ9:36)。「まことに、彼は私たちの病を負い、私たちの痛みを担った。」(イザヤ53:4a)

「この人を見よ、この人にぞ、こよなき愛はあらわれたる、この人を見よ、この人こそ、人となりたる 活ける神なれ。」(由木康作詞『馬槽のなか』21讃美歌280番4節)

上記を作詞した由木康は「イエスの神性はイエスの人性のうち包まれ、それを通して輝き出ている…」(『讃美歌21略解』日本基督教団出版)と述べました。

▷イエスのもとに集まった人々は日常の課題を抱えていました。イエスはそうした人々を知り、彼らに「御国の福音」を宣べ伝えられたのです。

